

# 地域と協同の 研究センターNEWS

2025年2月25日発行  
246号

## 2月22日(土)東海交流フォーラムを開催しました(開催速報)!

駒井義明 (地域と協同の研究センター専務理事)

**協同が生まれるまちづくり「協同」の一步をふみだそう**をテーマに開催。生協の役職員、会員、研究者のみなさんなど約80人が集まり、社会課題、地域課題にどう向き合い、どう一步をふみだすか、つながっていくのか、学び、深め合いました。東海交流フォーラムで協同が生まれるまちづくりをメインテーマに掲げて3年目となりましたが、研究センターを通して積み重ねてきたつながりのなかで、岐阜で、愛知で、三重で、そして、滋賀からも、それぞれの地域で協同の一歩、二歩、三歩へと実践をすすめている人々の取り組みと思いが、本山のフォーラムの場に結集しました。



森代表理事があいさつとして、協同を実感できる社会に向けてどうすればいいかと、本日のねらいとして会場に投げかけました。

その後、協同が生まれるまちづくりの実践報告について、代表理事補佐の向井さんがコーディネートしました。

総合司会の奥田智子さん 森 政広代表理事挨 ゴーディネーターの向井 忍さん

### 【協同が生まれるまちづくり実践】に学ぶ一報告とディスカッション】

報告:「いっぽ・にほ」から「さんぽ」へ協同の労働の力

櫻井早苗さん(ワーカーズコープ愛知三河事業所所長)

櫻井さんは明日「生活介護さんぽ」が開所式という忙しい中報告していただきました。豊川市で、「放課後デイサービスいっぽ」を2014年に、同じく「にほ」を2017年にスタートさせるなど活動をすすめてきました。一人暮らしの高齢者など、地域には人とのかかわりが途絶えた方がいるのではなく、つながりをつくる居場所をつくるため「みんなの食堂」も立ち上げました。「医師中村哲の仕事・働くということ」の映画会を開催してきたが、その取り組みで人と人がつながり、さんぽの立ち上げもできたということでした。スタッフは、若い人もいるそうで、みんな映画会でやる気になっているとのこと、やっただけ収入もあり、励みになるということでした。居心地のいい、愛のある居場所を作りたいと思いを語りました。

◆今日のまとめ



櫻井 早苗さん

【2ページにつづく】

### 地域と協同の研究センター 2月の活動

1日(土)アジア・ボランティア・ネットワーク東海の学習交流会

14日(金)被爆ピアノコンサート

5日(水)協同組合ネットあいち幹事会

22日(土)第21回東海交流フォーラム

6日(木)JCA全国交流会、第8回協同の未来塾

25日(火)研究フォーラム地域福祉を支える市民協同

13日(木)協同組合研究組織交流会(京都)

26日(水)常任理事会

三河地域懇談会世話人会

目次

2月22日(土) 東海交流フォーラムを開催しました  
(開催速報) !  
3つの学びと気づきの場についての感謝とこれから

1	ウクライナ避難民の現状と協同組合ができる支援活動 情報クリップ	5
4	書籍紹介 「はじめの一歩教室」やってるよ!	6
		8

## 【1ページからつづく】

### 報告:「おたがいさまの家」を拠点に地域が変わったーたからブロック

速水滉さん(南医療生協理事) 吉野光汰さん(南医療生協職員)

おたがいさまの家は、南医療生協ですすめている常設型サロンです。家賃、水光熱費なども組合員の自治ですすめられています。医療生協職員の吉野さんも、組織は一銭も出していない、職員主導ではないと強調されました。そのおたがいさまの家は10か所あり、報告された速水さんは名古屋市南区の「二人三脚」をコロナ禍の中オープンさせ、ここにくると元気になる場所、何かながれる場所をめざして活動されてきました。とくに、みなさんの楽しみは、バスハイクのようで、次はいつなの?いつなの?と問い合わせがあるということでした。車いすの方が参加したいといえば、どうやって乗せるかを事前に準備するなど、それも楽しい活動のようでした。

バスハイクで楽しく「対話運動」



食べられて誰かにつながれる

場所をめざして活動されてきました。

とくに、みなさんの楽しみは、バスハイクのようで、次はいつなの?いつなの?と問い合わせがあるということでした。

車いすの方が参加したいといえば、どうやって乗せるかを事前に準備するなど、それも楽しい活動のようでした。

### 報告:「始まった、協同の縁(えにし)交流会」新城～飛騨高山～滋賀へ

廣田令寿さん(JAひだ)、松原滋さん(コーパぎふ飛騨支所)

加藤久美子さん(JA愛知)、福田真由美さん(JAグリーン近江)

冒頭、コーパぎふ飛騨支所の松原さんがオンラインで、活動の紹介をしてくれました。新城のやなマルシェへの見学に行ったことがこの活動の始まりと。研究センターがつないでくれたと、評価ももらいました。JAひだの廣田さんは、Aコーパが10店閉店する中で空き店舗の利活用が、JAとコーパぎふの協同組合間協同ですすぎのこと。協同の3つの力真ん中には人がいる、共生、共助、共働があり、地域課題解決のため協同の力を發揮して元気な地域をめざすのが協同の縁の取り組み、理念だということです。活動としては、あつたかルームというミニディアだったり、釣り教室、eスポーツ大会、多様な世代の場づくりになっているとのこと。2024年10月には、協同の縁交流会を飛騨市で開催し、これが評価され「IYC(国際協同組合年事業)認定第1号」となったと力強く報告がありました。JA愛知東地域ささえ愛組織(やなマルシェ)の加藤さんからは、たいへんそうとか言われる、楽しくみえるとも言われる、実際にやりがいがあり楽しいのだと補足があり、大切なのは、気づいた人がやる、巻き込まれ力が大切だと強調されました。

JAグリーン近江の福田さんは、住み続けたい、住んでみたい、来てみたい地域をめざして取り組んでおり、誰にでもできるはじめの一歩を交流しようと、5月2日(金)に滋賀県の日野町で「協同の縁交流会」第2回が開催されると紹介しました。



オンライン参加の松原さん(小さい)



左から福田さん、加藤さん、廣田さん

### 【特別報告「協同組合のアイデンティティ話し合いの呼びかけ】

ICA(国際協同組合)ニューデリー総会を終えて 前田健喜さん(日本協同組合連携機構・JCA)

各分散会の紹介のあと、JCAの前田さんから報告がありました。ICAインド総会で何が決議され、JCAとしてどう対応するか、協議となったアイデンティティの改定案について説明してもらいました。特に、第7原則の地域社会(コミュニティ)への関与は、地域社会(コミュニティ)への積極的関与へと強める案となっており、協同組合は、事業を展開する地域社会の幸福とすべての人びとのために平和で公正かつ環境的に持続可能な未来のために活動すると、内容について説明されました。これから、考え合う場づくりをすすめていく予定です。



JCAの前田さん

## 【地域懇談会別分散会「協同の一歩のふみだし方】

**三重地域懇談会:多文化・多様な共生社会のひろがりに学ぶ**というテーマで分散会を開催しました。みんなこの西村先生、鈴鹿高専の学生二人も参加しました。岐阜地域懇談会の活動として2024年11月に岐阜の各務原市の「八木山ささえあいの会」を訪問したこと、外国をルーツとする住民1600人が暮らす四日市笛川地区で活動する「みんなこ」、そして、「みんなこ」と食品ロスの削減でつながった鈴鹿高専の学生も参加して、分散会で意見交換しました。



**尾張地域懇談会:買物からうまれた「班」とつながり、その過去、現在、未来**というテーマで分散会を開催しました。生協の原点に立ち返ってみる、労働者協同組合の活動に注目する、様々な協同のありようを考えるなど、ワーカーズの藤井さんや参加者の活動や思いを出し合って意見交換しました。

**三河地域懇談会:居場所の大切さを学び、考え、語り合う**というテーマで分散会を開催しました。東海交流フォーラムに初めてリアル参加されたやなマルシェの加藤さんから、やなマルシェの現状を紹介いただき、三河地域懇談会世話人会からの報告（平和の学習会、えざね協同ファームや安城よこやまへ寄らまいかんなど）がありました。メインの報告は、NPO「ing」の松岡さんのお話です。参加者から質問も出され、居場所の大切さ、生協でのつながりなどが支えになったことを深めあうことができました。



## 岐阜地域懇談会:人と地域がつながる協同・ささえあい～誰もがキーパーソン！？

というテーマで分散会を開催しました。八木山ささえあいの家の清水さんからは10月に岐阜地域懇談会が主催したプチフォーラムin岐阜の様子やそれ以降の活動の報告がありました。「私がキーパーソンとすれば キーパーソンのおかげでいっぱい喜びに会える」という言葉が印象的でした。福井さんからは、生協の班のつながりが支えてくれた山県市でのサロン活動の様子が報告されました。井貝さんからは、ささえあいの家にあこがれて、瑞浪の地域で毎週開催のサロン「いなほ」の取り組みが紹介されました。みなさん、生協や研究センターというつなぐ場が一歩につながった、支えになったと思いが共有されていました。



## 【まとめの全体会】「現代社会における協同の意味を考える」

**小木曾洋司さん(中京大学現代社会学部教授／研究センター常任理事)**

小木曾さんは、「いっしょにくらしていくための方法」、それがつながるということであり、つながれば安心して、終の住み家として暮らしていく。地域で役立つ能力や知力は出会えなければわからない、出会ってはじめてわかる。家族に頼るには無理なので最終的には地縁となる。出会いで大切なのは、人を否定しないということ、違いがあるのでたくさん話すこと、はじめの一歩で何が大切か報告がありました。



中京大学小木曾さん

## 東海交流フォーラムのまとめと第6期中期計画(2025～2028)検討の呼びかけ

**駒井義明さん(研究センター専務理事)**

駒井さんはタリバンに追われて難民となりコープあいちで雇用されている方の動画を紹介しながら、報告がされました。私たちが住む地域には、一人暮らしの高齢者やシングルマザー、そして、紹介のような難民の方も住んでいます。生協が「大きな協同」として責任を果たそうとしているが、地域での私たちのはじめの一歩が大切であり、それが国際協同組合年のテーマにも重なるのではないかと、まとめがされました。地域と協同の研究センターの第6期中期計画は誰が主体かといえば、会員が主体で主人公であり、一緒に作っていきましょう、意見をくださいと呼びかけがありました。また、総会では、「小さな協同」をテーマに記念シンポジウムも予定していると報告がありました。



パワーポイントが動作せずあせりながらまとめをした駒井さん

(こまい よしあき)

## 3つの学びと気づきの場についての感謝とこれから

駒井義明（研究センター専務理事）

地域と研究センターでは、2009年より、生協役職員が協同組合について学び気づきを深める3つの事業を順次開設してきました。

**1つ目は、生協職員マイスターコースです。**当初は、無店舗事業マイスターコースという名称で始まりました。それから共同購入事業マイスターコースとなり、2024年から生協職員マイスターコースへと名称を変え、対象もコーポ宅配地域担当から生協職員やパートナー組織スタッフなどに広げて開催しています。これまで400人を超える職員が参加し、職場の中で重要な役割を担ってきたと思います。

プロの専門スタッフとしての生協職員=マイスター(ドイツ語の職人、名人や名手)を育みあうことを目的として、年間7回の単元設定ですすめています。協同の価値と生協職員の仕事を学び考え、生協運動をあえて掲げてその使命と価値を深めるようにしてきました。コミュニケーション、ホスピタリティ、モノづくりの心、消費者の権利や制度など、学識者有識者みなさんに関わっていただきながら、事前課題に取り組んだり、グループで深め合うようにしてきました。そして基幹事業である宅配の誰もが認める「技術水準」を身に着けるのです。2025年3月1日で修了式を迎えます。

**2つ目は、協同の未来塾です。**未来塾は2015年に開講しました。協同組合、生協について専門的、理論的に深く学ぶ場として9単元ですすめています。協同を経済や社会の面から理論的に自信を持って語れ、協同の未来創造にロマンを馳せ、実践的な主体創造を育みます。180人を超える職員が参加し、生協の中心となって役割を果たしてもらっていると思います。未来塾には、ぎふ・あいち・みえだけでなく、大学生協のみなさんも参加しています。協同組合論、協同組合史、コミュニティ器官としての協同組合の役割、資本主義経済システムとの関係、消費者の権利、マーケティング論、イノベーション論、など短い言葉では表しにくいのですが、協同組合、生協がこれから求められる役割について自分たちで考えることを大切にしてすすめています。3月6日で修了式を迎えます。



**3つ目は、生協の新任組合員理事さんを対象にした組合員理事ゼミナールです。**2010年より開講し、自分の考えを表現し、他者(仲間)の意見を受け止めて共感できる、暮らしの実感を持ちさえあいをつなぐ担い手となるよう、組合員理事として情報知識を得て学びあい役割を果たせるよう場づくりをしています。組合員理事の任期2年をかけて、9回開催しています。ぎふ、あいち、みえの3理事長、日本生協連の二村常務にも講義を受け持っています。150人の組合員理事が参加してきました。



森代表理事と兼子厚之さん

### 兼子さんに感謝を込めて

この3つの学びの場を創り、発展させてきたのは、当時の生協役員の思いと、日本生協連などを経て、地域と協同の研究センターに在籍した兼子厚之さんの功績が大きかったと思います。これまでの当たり前に一石を投じる商品部時代の商品開発(化粧パフやミックスキャロット)、生協の時代を創ってきた人々との関わり、学び培ってきた協同組合論、そして、社会に向き合ってほしいという強い思想を体現するように研究者や有識者のみなさんをつないで組み立て、先頭に立って講義を担い、受講者と向き合ってこられました。

こうして、マイスターコースが始まってから3つに広がって、15年が経ちました。兼子さんも自宅のある北海道から講義のたびに来てくださいました。研究センターも30年、長い時間がたっており、大きな見直しが必要と兼子さんと相談をしました。ぜひ、改革をしてほしいとおっしゃっていました。2025年度から新しい学識者有識者のみなさんにも参加していただき、徐々にですが、改革につなげていこうと思っています。すべては、受講するみなさんが協同組合、生協として、組合員や事業に責任を持ちながら、地域や社会に対して、変化の中で役割を果たしていくという人づくりにつなげるためです。兼子さんは2024年度までとなりますが、感謝を込めてその思いを、この国際協同組合年という節目につないでいくようにしたいと思います。

(こまい よしあき)

## ウクライナ避難民の現状と協同組合ができる支援活動

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

### はじめに

日本におけるウクライナ避難民支援は、政府、非営利団体、地域社会など多方面から多様な取り組みが行われています。しかし、避難生活が長期化する中で、就労や言語の壁、精神的なケアなど、新たな課題も浮上しています。ウクライナ避難民の多くは女性や子ども、高齢者であることも特徴です。

2025年1月31日現在、日本に入国したウクライナ避難民の数は2,747人で、そのうち日本に在留している人は1,982人です。内訳は、女性が1,944人、男性が803人、18歳未満の子どもが410人、61歳以上の高齢者が380人となっています。地域別では、愛知県に121人（うち18歳未満が18人、61歳以上が20人）、岐阜県に10人（うち18歳未満が3人、61歳以上が1人）、三重県には61歳以上の避難民1人が在留しています。

### 在留資格と支援制度

ウクライナ避難民には「特定活動」の在留資格が付与され、最長1年間の滞在が可能で、その後の更新も認められています。2023年12月には補完的保護制度が開始され、難民認定者と同等の「定住者（5年）」の在留資格が付与されるようになりました。この制度のもとで、生活支援プログラムも提供されています。

支援金制度として、日本財団はウクライナ避難民2,000人に対し、1人あたり年間100万円、最長3年間で合計300万円の生活費支援を提供してきました。また、日本政府は身元保証人がいない避難民を対象に、生活費として日額2,400円を最長2年間支給しています。しかし、戦争が始まって3年が経過し、こうした財団や政府の支援が終了することで、帰国や他国への移動を選択する人も増えています。一方で、日本財団が2023年11月から12月にかけて実施したアンケート調査によると、回答者の39%が「できるだけ長く日本に滞在したい」と答えています。2022年6月19日から8月30日にかけて実施したアンケート調査では、回答者の73.7%が「ウクライナの状況が落ち着くまでは、しばらく日本に滞在したい」または「できるだけ長く日本に滞在したい」と答えています。

### 避難民が直面する課題

避難民の就労や、日本語学習の機会、住宅の確保や医療へのアクセスにも課題があり、生活の安定にはさらなる支援が求められています。これらの課題は、日本に暮らす移住者や難民にも共通しており、長期的かつ包括的な支援の仕組みが必要です。

### 協同組合による支援の可能性

協同組合が持つ資源やネットワークを活用することで、実現可能な支援があるのではないかでしょうか。

#### 雇用の機会提供、生活物資の提供と地域支援

ウクライナ避難民の在留資格である「特定活動」や「定住者」には就労制限がなく、日本国籍の人と同様にどのような業務にも就くことができます。協同組合のネットワークを活用し、農業、福祉、サービス業などの分野で安定した雇用機会を提供することができるのではないでしょうか。ウクライナ避難民には農業の経験、芸術のスキルを持つ人たちが多く、そのような経験やスキルを活かすことができるこれが理想です。その際、日本語に頼らないコミュニケーション方法や就労環境を整える必要があります。

食料品や日用品の支援活動による生活支援や、組合員と避難民との地域での交流を促進することも可能なのではないでしょうか。例えば、コープあいちでは共同購入制度を活用した寄付支援を行ったり、コープこうべでは店舗での雇用機会を提供するなどの取り組みが行われています。

また、日本語学習プログラムを提供し、避難民の日本語力の向上を支援することも求められています。さらに、日本の教育機関で学ぶ子どもたちの学習支援や、ウクライナ人としてのアイデンティティを保持するための母語教室の支援も重要な取り組みであると考えます。

### まとめ

ウクライナ避難民への支援は、日本で暮らす移民・難民にも共通する課題を含んでいます。これまでの経験や既存の制度・リソースを活用しながら、ウクライナ避難民の定住支援を継続し、より包括的な移民・難民支援へと発展させていくことが求められます。協同組合の「助け合い」の力を活かし、日本で暮らす避難民・移民・難民が安心して生活できる環境を整えていくことが、社会全体の安定と多様性の促進、豊かな社会づくりにつながるでしょう。

（かんだ すみれ）

# 情報クリップ<sup>®</sup>

co-opnavi 2025.2 No.873

## 特集 職員が生き生きと働き続けられる制度や環境づくり

日本生活協同組合連合会 2025年2月 A4判 32頁 363円（消費税込）

<私たちの「この一枚」> パルシステム東京  
 「障害者雇用優良事業所等の厚生労働大臣表彰」を受賞  
 人事部 人事・育成課 主任 福元研太  
**特集**  
 職員が生き生きと働き続けられる制度や環境づくり  
 <今日も笑顔のコープさん> 富山県学校生協  
 <想いをかたちに コープ商品>  
 CO・OP発芽玄米スパゲティタイプ  
 <生協大好きママコプ山さんの 教えて！CO・OP商品>  
 CO・OP応援食ココアクッキー  
 最終回<CO・OPの役立ち♪家庭用品>  
 CO・OP《コープメイク》つや花口紅（紅花色素入り）  
 CO・OP《コープメイク》密着カラーラージュ

<組合員に支持される店づくり・売場づくり>  
 コープさが生協  
 <日本全国宅配現場におじやまします>  
 第11回全国生協安全運転大会  
 <松丸 横先生の食育エッセイ> 進め栄養！  
 <生協のDE&I 多様性のある職場をつくろう>  
 エフコープ  
 <この人に聞きたい>  
 ブルーバードブックス 草薙みちるさん  
 <ほっとnavi>  
 みやぎ生協・コープふくしま／生活クラブ生協・千葉

生活協同組合研究 2025.2 VOL.589

## 特集 地域からつむぐ協同組合のアイデンティティと明日

公益財団法人 生協総合研究所 2025年2月 B5判 80頁 定価550円（消費税込）

巻頭言 「2025年の漢字」は「協」にしましょうよ！ 中森一朗  
**特集 地域からつむぐ協同組合のアイデンティティと明日**  
 開会挨拶 中嶋康博  
 本研究会の開催趣旨 鈴木 岳  
 講演① 協同組合原則の変遷とアイデンティティ声明改定議論の状況—ロッヂデールから今日の協同組合まで— 杉本貴志  
 講演② 足元から出発して社会的生態系を編む拠点としての協同組合等社会的連帯経済 一番大変なところに駆けているのか (SDGs) を振り返りつつ 田中夏子  
 実践報告①OCoNoMi おおさかの設立と活動について 中村夏美  
 実践報告②人口減少先進地・飛騨市「地域複合サロン」から見えてきた協同 松原 滋  
 実践報告③消費者信用生活協同組合 船ヶ澤堅一

実践報告④労働者協同組合で実践する地域づくり 國仲義隆  
 パネルディスカッション  
 杉本貴志・田中夏子・中村夏美・松原滋・船ヶ澤堅一  
 國仲義隆・三浦一浩（司会）  
 ■国際協同組合運動史（第35回）  
 1957年第20回ストックホルムICA大会① 鈴木 岳  
 ■本誌特集を読んで（2024・12） 久保田修三・齋藤直人  
 ●公開研究会  
 生協総研賞・第21回助成論文報告会（3/14）  
 居住支援と空き家活用—住宅のかたちを考える（3/26）  
 ●生協総研賞第15回表彰事業候補作品推薦のお願い  
 ●生協総研賞第15回表彰事業実施要領（抄）  
 ●2025年度「生協社会論」受講生募集

文化連情報 2025.2 No.563

## 100万人規模の圏域で、救急医療担う中核病院として

日本文化厚生農業協同組合連合会 2025年2月 B5判 72頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 \*注

地域医療を守る医療経営を継続するため、医薬品の適正な価格交渉環境の確保を  
 会員の声を集め、厚生労働省に要請 佐治 実  
**JA愛知厚生連足助病院**  
 第13回日本医師会「赤ひげ大賞」を早川富博名誉委員長が受賞されました 林 菜緒

院長インタビュー（354） 土浦協同病院  
 100万人規模の圏域で、救急救命を担う中核病院として 広岡一信  
**書籍紹介**  
 一歩いっぽ 安心の地域づくりを 吉川徹  
 医療革新・新時代における臨床工学技士への期待 村上円人

**第40回厚生連薬剤師研修会を開催しました**  
**協同精神のリレー (23)**  
 3・11 一協同の記録 (抄) 伊藤澄一  
**二木教授の医療時評 (228)**  
 「かかりつけ医機能が発揮される制度整備」の評価と  
 それへの対応 二木 立  
**茨城県で文化連経営管理委員会を開催**  
 土浦協同病院を現地視察しました  
**海南病院薬剤部供給室における**  
 経費節減のための新たな取り組み 濱浦弘光  
 新連載 農高生と地域を作る  
 ~我はいかにして農業高校教員となりしか~ (1)  
 高校時代、図書館の書棚から偶然手にした一冊の本 橋本 智  
**食べ物から考える<共 コモン>の仕組み (3)**  
 コモンズとしての食 ／ 食の再コモンズ化 平賀 緑

**「医工連携」が拓く医療技術イノベーション (7)**  
 オーストラリアで最も有名な外科医の一人、ビクター・チャン  
 との出会い 梅津光生  
**多様な福祉レジームと海外人材 (79)**  
 不法滞在者か、それとも労働者か 安里和晃  
**臨床倫理メディエーション (79)**  
 生成AI (人工知能と倫理) 中西淑子  
**デンマーク&世界の地域居住 (187)**  
 ゆっくり、まつり、のんびり・・・  
 「お茶の間 ぶちだがしやさん」  
**NPO 法人にしのみや次世代育成支援協会 (兵庫県西宮市)**  
 松岡洋子  
**▶線路は続く (193)**  
 みちのくの玄関口に残る白棚線 ／ 西出健史

**社会運動 2025.1 No.457**  
**いまこそ、協同組合の出番 2025年は国際協同組合年**  
**一般社団法人 市民セクター政策機構 2025年1月 A5判 176頁 本体価格1,100円(消費税込)**

**FOR READERS**

いまこそ協同組合の出番  
**・part 1 協同組合のアイデンティティ**  
 協同組合アイデンティティ改定の協議と  
 2025国際協同組合年  
 一般社団法人日本協同組合連携機構 常務理事 伊藤治郎  
 若手研究員を中心に日韓協同組合研究がスタート  
 第22期日本協同組合学会長 関西大学商学部教授 杉本貴志  
 第21期韓国協同組合学会長 金 享美  
**・part 2 持続可能な社会に向けて**  
 理想と現実の狭間で考える「組合員主権」と  
 「政治的自由」の価値  
 市民セクター政策機構 研究員 白井和宏  
 ワーカーズ・コレクティブと自治体との連携・協働の可能性  
 立教大学コミュニティ福祉学部  
 コミュニティ政策学科教授 原田晃樹  
**女性が主体となる協同組合の実践**  
 大東文化大学国際関係学部 准教授 金 美珍

**・part 3 組合員参加とコミュニティへの関与**  
 生活クラブの希望の未来を展望する  
 生活クラブ生協・東京 理事長 加瀬和美  
 生活クラブ生協・埼玉 常務理事 鳥山直人  
**生協運営における業務委託**  
 ワーカーズ・コレクティブの可能性  
 ワーカーズコレクティブネットワークジャパン  
 (WNJ) 代表 藤井恵理  
 生活クラブ生活協同組合・神奈川理事長 篠崎みさ子  
 労働者協同組合ワーカーズコレクティブ・リアン代表理事  
 濱戸久子  
**協同組合による居住支援・生活支援の可能性**  
 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 祐成保志  
 東京大学大学院人文社会系研究科助教 稲所真也  
**原州協同組合運動の新たなアイデンティティのための小考**  
 原州協同社会経済ネットワーク理事長 朴 俊英

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✿)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

## 書籍紹介

樽松 佐一 会員からの書籍紹介



## 「はじめの一歩教室」やってるよ！名古屋の自主夜間中学奮闘記

著者:高橋龍介 出版日:2024年11月 価格:1540円(消費税込)  
出版社:同時代社

## 樽松 佐一 会員からのご紹介

2020年の秋、反貧困ネットワーク「子どもの貧困グループ」が映画「こんばんはⅡ」上映会への協力を求められました。私が夜間中学に関わる最初のきっかけです。「こんばんはⅡ」は「夜間中学について知る・学ぶ・考える」がテーマで「愛知公立夜間中学の設立を求める会」のキックオフ集会となりました。私も事務局の一員とされたので、代表の笹山先生に「どうして教員でもない私が事務局に入るのか？」と聞くと、「あんたは県と交渉するときに使えるから」だそうです。以後革新県政の会県交渉では毎日夜間中学問題を取り上げ、最初はやらないと言っていた愛知県も今年度1校、26年度には3校開設することになっています。

笹山さんたちは2000年の5月に北医療生協の施設を借りて自主夜間中学「はじめの一歩教室」を始めました。そこには様々な理由で学校に行けなかったお年寄りから、子ども連れのお母さん、日本語がわからず授業についていけない外国人生徒など年齢も国籍もばらばらで、ごちゃやまぜになって勉強していました。

みなさんもお気づきだと思いますが最近ネパール料理店があちこちにできてきました。彼らは「技人国」という在留資格で家族も一緒に来ており、その子どもたちが一歩教室に来ています。日本語が全くわからず授業についていけなくとも15歳になると中学は卒業になります。高校の試験は受からないので、まともな就職先が見つからず、職につけない若者も少なくありません。私は外国人実習生相談室でいろんな国の知り合いがおり、こういう事情もわかります。

笹山さんたちは毎週の「一歩教室」で数百人の学習者を支援すると同時に県、名古屋市教育委員会への働きかけ、そして全国で夜間中学に取り組んでいるみなさんとも運動をひろげています。

今回この取り組みを支援者の一人でもある高橋龍介さんが本してくれました。元毎日新聞の記者である高橋さんはインタビューも上手で「ごちゃやまぜ」の一歩教室の様子をとてもリアルに描いてくれました。とても読みやすいので、ぜひお読みください。

## 研究センター3月活動の計画

- 1日（土）能登半島避難者学習交流会
- 2日（日）生協の（未来の）あり方研究会
- 6日（木）第9回協同の未来塾
- 8日（土）東海交流フォーラム実行委員会、第4回理事会
- 16日（日）サードセクター研究会
- 20日（木）多文化料理教室（千種区委託企画）
- 24日（月）常任理事会
- 29日（土）難民食料支援学び語り合う会、友愛協同セミナー

地域と協同の研究センター

Facebook

下記QRコードでご覧ください。

Facebook QR コード



地域と協同の研究センター

ホームページ

下記QRコードでご覧ください。

ホームページ QR コード



※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止等のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。